

一陣の風を捉えて飛び出せば北アルプスの峰せり上
がる 谷岡重紀

パラグライダーの歌である。秋の白馬のスキー場から
飛んだらしい。「飛び出せば……せり上がる」は、体験
してこそ感覚で、一首はここを中心に組み立てられて
いる。注文をつければ、「一陣の風」はあまりにも無造作、
不用意だったと思う。

パラグライダーの歌、じつさいに自分で飛んでいるパ
ラグライダーの歌は、まだまだ少なく、ぜひ多くの短歌
を作ってほしい。

コロラドの丘見てをればそれぞれの地層暗みて映暮
れゆけり 佐佐木頼綱

アメリカ大陸の広大な自然をうたった今月の五首の最
初に置かれた作。地層がむき出しになった大渓谷の日没
前の何十分かの劇的な変化をクローズアップする。他に
も注目した作があつたが、地名が入ったこの作をここに
選んだ。私は地層が見える大渓谷はグランドキャニオン
しか知らない。ここは地名が一つ、ポイントになつてい
る。

忍海^{おしづみ}すぎ御所^{ごしよ}すぎ生野^{おぶす}、老野^{おのの}すぎ神野^{かむら}、十津川村へ
はまだまだ 又野妻

古い地名を六つ列挙にして、古典和歌の道行きを思い
出させる独特の世界を作っている。具体的には、十津川
村へと向かうバスの駅名らしい。

黄葉ふるベンチに揺るるおばあさんの柔らかさうな
真つ白い髪 大塚泰子

短歌の現在

No.417 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

不思議な一首である。よく分からないが、なんとはな
しの魅力がある。なぜおばあさんは揺れているか。なぜ
おばあさんはベンチにいて、なぜ作者は興味をひかれた
のか。ほのぼのと立ちのぼる魅惑の何かがあつたのだろ
うか。

空っぽをひとつずつ持つ楽しさを重ねて帽子売り場
の帽子 大谷ゆかり

帽子屋をおしゃれに楽しくうたう。帽子屋の店にある
帽子は、なるほど、みな空っぽである。歌の修辭として
は、「……楽しさを重ねて」とくに「重ねて」がうまい。

プリンタとメールを繋いでようやく社内私に私の港
が出来た 笹本碧

転職して新しい会社に出勤した日の歌らしい。現在は
どんなオフィスでもみな、個人の机にパソコンがある。
そのパソコンをネットワークにつないで、はじめて実際
的な意味で社員になる感じ。そのあたりを表現して「私
の港」は、うまい。

冬枯れの雑木林を徘徊すエナガ、ビンズイ、朝練の声
森部信次

「……エナガ、ビンズイ」と鳥の名前のおと、読者の
予想を裏切つて「朝練の声」という意外なものが登場す
る。この気合い、この意外性が、ユーモラスな味わいを
もたらしている。

ため息を呑み込み居れば身の底に古き油の凝る気の
せり 小川祐子

「ため息を呑み込みたれば」ではなく「……居れば」